

「島国の環境が創った我が国の歴史」

黒田裕樹（ブログ「黒田裕樹の歴史講座」）

1. 日本列島の地理的環境がもたらした「天然の防壁」

皆さんご存知のとおり、我が国は周りを海に囲まれていますね。でも、かつては大陸と陸続きだったのです。

氷河時代と呼ばれる更新世(こうしんせい)の頃は、海面が現在より100m以上も低下したために、日本列島は北と南でユーラシア大陸と陸続きになりました。やがて北からはマンモスやヘラジカ、南からはナウマンゾウやオオツノジカなどの大型動物が大陸から移動して、人類もそれらの大型動物を追いかけて日本列島に渡来したと考えられています。

その後、今から約1万年余り前に氷河期が終わって完新世(かんしんせい)になると、気候が温暖化して海面が上昇し、日本は大陸と切り離されて、現在の日本列島が成立しました。実は、この列島化こそが、その後の我が国の運命を決定付けた大きな出来事だったのです。

なぜだか分かりますか？

それは、我が国が大陸と海でへだてられたという地理的環境が、我が国が中国大陸などの他の勢力から侵略を受けるという危機から守ってくれたからです。

もし他の勢力が我が国を攻めようとすれば、避けて通れないのが海という「天然の防壁」です。これがあるために、多数の軍勢を率いて攻め寄せるには、軍勢を運ぶだけの大量の船がどうしても必要となります。

大量の船を作ろうと思えば莫大(ばくだい)な資本が必要ですし、それだけの大きなエネルギーを使い果たしてまで我が国を攻めようにも、失敗した場合のリスクが大きすぎるため、おいそれとは決断が出来ません。

かくして、我が国は他国の政治や軍事の情勢に巻き込まれたり、あるいは異民族からの侵略を受けたりすることもなく、その一方で大陸の文明の影響を受けながら、独自の歴史と文化を生み出し、育てることができました。

比較しては申し訳ないのですが、中国大陸と陸続きだった朝鮮半島は、大陸側からの侵略を何度も受けるという危機に見舞われ続けました。紀元前の時代から、中国の前漢によって半島北部が直轄

地とされ、楽浪郡(らくろうぐん)などが置かれています。絶えず侵略の危機にさらされるという状況では、大陸文化の影響は我が国よりも強く受けることが出来た一方で、独自の文化を育てようにもその余裕がなかったのが実情だったのです。

2. 中国大陸との交流 ～混乱と統一のはざままで

こうして我が国は独立を守りながら発展を続けることが出来たのですが、そこには中国側の思惑があったことも見逃せません。中国は陸続きの朝鮮半島を侵略の対象として何度も攻め続けましたが、海をへだてた我が国が、半島側と同盟を結んで逆襲すれば厄介なことになります。

そこで、中国は我が国を味方に引き入れようと様々な工作をしました。例えば、紀元 57 年に後漢を訪問した奴国(なこく)に「漢委奴国王(かんのわのなこくおう)」という金印を授けたり、239 年に魏(ぎ)を訪問した邪馬台国(やまたいこく)の女王卑弥呼(ひみこ)の使節には、金印の他に多数の銅鏡などを贈ったりしています。

特に、卑弥呼の使節に魏が与えた宝物(ほうもつ)は、他の朝貢国と比較にならないくらい量が多かったそうです。多数の宝物を贈ったという事実は、魏には邪馬台国を自分の支配下に置くことにより、外交上の優位に立ちたいとする思惑があった何よりの証拠です。

また、邪馬台国にとっても魏との外交は、我が国内で優位に立つためのひとつの手段だったとも考えられます。いざとなれば中国大陸から援軍がやってくるかもしれないという可能性は、邪馬台国と対立する他国にとっては大いに脅威(きょうい)だったことでしょう。それゆえに、中国が混乱状態になって邪馬台国が大陸との縁(えにし)を失ってしまうと、大和朝廷によって征服されてしまったという仮説が成り立つのです。

我が国を統一した大和朝廷は、今度は中国の南朝と外交関係を持ちました。雄略(ゆうりやく)天皇が南朝の宋(そう)という国に使者を送った事実は有名ですね。なお、中国では「倭王武(わおうぶ)」と記録されています。

しかし、それはあくまで我が国が中国の臣下として屈服するという、朝貢外交が前提でした。

時代が進んで 6 世紀後半になると、隋(ずい)が中国大陸を約 300 年ぶりに統一しました。中国大陸にひとつの大国が誕生したという事実は、それまで独立国の高句麗(こうくり)、百濟(くだら)、新羅(しらぎ)の 3 つに分かれていた朝鮮半島のみならず、我が国にも大きな衝撃を与えました。

中国が混乱状態となったことによって、それまで大陸の外に向けられていたエネルギーが内に向かうと、それを待っていたかのように朝鮮半島の国々が次々と独立を果たすことができたのが、新たな統一国家である隋の誕生によって、内に向けられていた巨大なエネルギーが再び外へ押し出されることになり、東アジアの情勢が一触即発となってしまったからです。

果たして隋は、統一後間もなく陸続きの高句麗と戦争状態となりました。一度は隋の猛攻をしのい

だ高句麗ですが、危機にあることに変わりはありません。もし隋が仮に朝鮮半島をすべて侵略してしまえば、豊富な経済力によって多数の船を従えて、我が国に大軍を率いて攻め寄せる可能性が十分考えられました。

3. 聖徳太子と遣隋使 ～対等外交で見せた我が国の「気概」

隋による我が国への侵略という最悪の事態を回避するため、我が国の隋に対する外交問題は非常に重要なものとなりましたが、そんな中で、誰もがあっと驚くような強気的外交を展開した政治家がいます。もちろん聖徳太子(しょうとくたいし)のことです。

聖徳太子は、隋と最前線で戦う高句麗や、古くから付き合いのある百済と三国で同盟を結んだ後、607年に小野妹子(おののいもこ)を使者として遣隋使(けんずいし)を送りました。その際に隋に送った国書が、有名なあの文面です。

「日出(ひい)ずる処(ところ)の天子、書を日没(ひぼつ)する処の天子に致す。恙無(や)きや(つつがなきや、お元氣ですか、という意味)」。

国書の内容を簡単に言えば、我が国と隋とをお互い「天子」と同じ立場で表現することによって、それまでの朝貢という上下関係から、天子同士の対等関係の外交を結びたいとする、聖徳太子の毅然(きぜん)とした意思表示でした。

この国書を見て激怒した、隋の皇帝であった煬帝(ようだい)は「こんな無礼な書は以後自分に見せるな!」と言い放ったそうですが、だからといって我が国を攻める余裕は、実は隋には全くありませんでした。

なぜなら、高句麗との敗戦によって隋の国力が低下しているだけでなく、それでも無理をして我が国を攻めれば、同盟国である高句麗や百済が反撃する可能性も十分考えられ、リスクがあまりにも高すぎるからです。

当時の軍事や政治の情勢を十分に調査したうえで、隋との対等外交を一方向的に宣言した聖徳太子の作戦勝ちでした。聖徳太子が我が国の気概を見せた外交は、中国による冊封(さくほう)体制から脱け出すきっかけとなり、我が国が本当の意味での独立を果たし、また後に独自の文化が開花するための下地をつくったといえるでしょう。

こんなことが出来たのも、我が国が島国なればこそです。

4. 朝鮮半島とのかかわり ～我が国防衛の生命線

さて、ここで皆さんに知ってほしい事実があるのですが、有史以来、我が国にとって防衛の生命線といえるのは、実は朝鮮半島の存在なのです。なぜなら、中国に存在する大国が我が国を攻めよう

と思えば、陸続きの朝鮮半島を先に支配しないといけないからです。

ということは、朝鮮半島が中国の支配を受けてしまえば、陸続きでなかったとしても我が国が侵略される可能性が高くなるのです。現実に鎌倉時代に「元寇(げんこう)」という形で一度そうなっていますね。元、すなわちモンゴル帝国が、当時の朝鮮半島を支配していた高麗(こうらい)を征服した後に、我が国に二度にわたって攻め込んできましたが、いずれも撃退することが出来ました。

ちなみに、元寇の際に我が国がモンゴル帝国に勝利できた理由としては、いわゆる「神風が吹いた」こと、すなわち暴風雨によってモンゴル軍が壊滅(かいめつ)したのが大きな原因とされています。それ自体は決して間違いではありませんが、他にも大きな理由があります。

何だと思いませんか？

実は、モンゴル軍がそれまでに他国を征服した際に大いに利用してきた騎馬軍団が、元寇の際には全くといっていいほど使えなかったのです。

なぜなら、騎馬軍団を構成する馬は非常に神経質な動物なので、海を渡って攻め寄せる際に、船に乗せることが大変難しいからです。かくしてモンゴル人は、得意の騎馬をほとんど使わずに我が国と戦わなければならないという大きな不利(ということ、我が国にとっては大きな有利ですね)があったのです。

島国という環境をフルに活かした我が国は、その後も独立を保ち続けながら、今日まで王朝の交代が一度もない、すなわち万世一系の皇室が存在するという、世界的にも例のない「奇跡の国家」となりました。

そんな国の国民でいられるということは、本当に幸福なことだと思います。

5. 「島国」ゆえの最大の危機 ～「平和ボケ」による大きなツケ

しかし、島国でいるということは、決して良いことばかりではありません。

江戸時代に入って、いわゆる鎖国(さこく)の状態が続くと、海外からの侵略を受けないことが我が国では当たり前と思うようになりました。戦国時代に鍛(きた)えたはずの軍事力がおろそかになり、国を守ろうとする防衛能力もいつしか低下しました。

こうして我が国は、俗にいう「井の中の蛙(かわず)」になってしまったのです。

我が国がそうしている間に、世界では大きな変革が起きていました。18世紀にイギリスで起きた産業革命によって発明された蒸気機関を鉄の船に積み込むことで、蒸気エンジンの力によって鉄製の船を容易に動かすことが可能になりました。いわゆる「黒船」のことです。

実はこの黒船が、我が国の「天然の防壁」を徹底的に否定することになってしまったのです。

なぜなら、黒船は丈夫なために、多数の人間や大砲などの銃器を積み込むことが出来るようになったからです。海から大砲や鉄砲などで狙い撃ちが出来るということは、海に囲まれている我が国にとっては、日本列島のどこからでも狙われるということになりませんか？

つまり、黒船の発明によって、我が国は「天然の防壁」どころか「どこからでも狙われる大変危険な国」になってしまったのです。

しかし、長年の「平和ボケ」に慣れ切ってしまった江戸幕府は、それまでの「島国の恩恵」が有名無実と化してしまっているにもかかわらず、かつての「島国の平和」が忘れられなかったのか、情勢の激変にも気づくことなく、いや、仮に気づいたとしても無視し続けていました。

その間にも、ペリーを乗せたアメリカの黒船は、着々と我が国に近づきつつありました…。

こうして我が国は世界の情勢に巻き込まれ、激動の時代を生き抜かなくてはならなくなります、ここから先の詳しい話は、いずれまた別の機会に取り上げたいと思います。（完）

主要参考文献：「逆説の日本史 13 近世展開編」（著者：井沢元彦 出版：小学館）
<http://www.shogakukan.co.jp/books/09379683>

YouTube 再生リスト「島国の環境が創った我が国の歴史」
<https://www.youtube.com/playlist?list=PLeZrZWY-wML5ISlomyREVzyp9kXSIivy9>

黒田裕樹の歴史講座
<http://rocky96.blog10.fc2.com/>